

卒業論文の書き方についての感想

——本年度卒業論文の審査から——

村 田 穆

本年はじめて本学の卒業論文を審査して、心づいたところを述べ、学生諸君の参考に与えたいと思います。

一、論文とはどんなものか、を知らぬ人の多いのに、まづ驚きました。そのためには、雑誌論文を読む習慣をつけること、「論究日本文学」「国語国文」「国語と国文学」などの純学術誌を月に一冊くらゐは精読すること。

と。さうすることによつて、論文とはどんなものか、を暗々裡に了得するばかりでなく、現在の学界の動向や学問の水準なども理解することが出来ませう。学生諸君がよく見てゐるらしい「解釈と鑑賞」「国文学」などは、便利な案内書で、書かれてゐるところ多く通俗的な解説です。これらを論文と思ひ誤つてゐる人も相当にある模様です。又、「文学」や「日本文学」なども、体裁は論文めいて、中は論文らしい突つ込みの足らぬもののあることも指摘しておきませうか。

二、次に、論文と感想解説評論の文との区

別をはつきり知つてもらひたく思ひます。

感想文といふのは、問題の所在も何も知らず、ただ自分はいふと思ふといふだけを書き綴つたものです。自分の感じは大切ですが、それは出発点です。そこから先学の研究を尋ね調べ、問題の所在を知つて、論文にまで仕上げるには道は遙かなのです。

解説文とは、作家なり作品なりについて、その知識をもつてゐない人に説明するものです。この類のものは、特に古典関係に相当多く見られました。先きに言ひました通俗誌の影響かと思ひます。作者の伝記やら作品の内容やらについての、自分なりの整理をしてみてそこから、論文ははじまるのです。

評論といふのは、問題の所在は知つてゐるが、例證を抜きにして、端的に論断するものを言ひます。この類のものは、特に近代関係に多く見られました。近代文学については、純学術誌にもまともな論文は甚だしく、通俗誌に書きなぐられた評論家諸君の一夜漬けの

五八

美文が、やたらと目につくからせう。評論の、例證を抜きにするといふことは、思ひつきを決定するものであるかのやうに書くことです。思ひつきは、例證を集めてみようと、しばしば覆るか、でなくとも、誤差の出るものなのです。或作家について、「告白と虚構の微妙ななひませ」と評論家風の美文に酔つたのがあります。この思ひつきを悪いといふのはありません。そこは終りでなくて、始めなのです。一体、その作家は何を告白したかつたのか。その告白の卒直な表出をはばんだものは何か。だから、どのやうな虚構を設けたのか。その告白をその虚構の中にかはめることによつて、どのやうな効果をあげたか。などと、その実状を具体的に解き明かさねば、論文にはならぬのです。

三、いよいよ論文を書くには、

(1) 自分に納得出来る対象を撰ぶこと。問題は大きくても小さくてもよろしい。行きあたりばつたりや点の取り易さうな題目を撰ぶことはよろしくありません。

(2) 方法は二つ。一つは、細かなことを精密に調べる方法、その積み重ねの上に將來の大をなさうとする方法です。もう一つは、まづ大観する方法、卒業論文には対象の地均し程度の見通しをつけるにとどめて、將來個々の問

題を掘り下げようとする方法です。何れでも、自分の性にあつた方法を撰ぶがよろしい。

(3)対象を撰んだら、それについて、従来どのやうな研究があるかを大畧承知しておくこと。細く知るためには、例へば、万葉や源氏や西鶴などの大物になると、三年や五年では追ひ着かぬかも知れぬし、一人前の学究でも見逃しは多く、諸君にそれは望めますまい。が、大畧の見通しだけはつけて、問題の所在を知り、自分の問題を取り上げねばなりません。一冊や二冊の、それも十年も二十年も昔の本を手当るままに取り上げて、それを頼りにでつちり上げたやうなものでは、何の役にも立ちません。

(4)その際最も大切なことは、何よりも原典に親しむことです。他の人の論ばかり読みますと、その人が老叟の論者なら、往々にすべての問題はそこに解決すみかのやうな感を与へられます。しかし、恐れることはありません。自分の眼で作品を読めば、先学とは違つた感じ方、読み方のあることに気づきませう。そこを手掛りに、先学と自分の違ひを掘りあてることが出来るのです。

(5)ところで、原典に接するときの心得とし

て、出来るだけ虚心に作者の声に耳を傾けることが大事です。既成の物指しで、安直に裁断してはいけません。すぐれた研究対象なら、一生をかけて追求しても窮め難いのです。先づ学ぶべきです。それを、その人の一生をかけた仕事を、一年や二年の研究で、くだぬ公式をふりかざして、作者や作品の限界などとほざいてみても、自分の低脳さ加減を示す以外の何ものでもありません。まづ、故人の求めたところを求めよです。

(6)つまり、卒業論文とは、自分の二十年の年月をかけて、何を学んだかといふことを整理したものなのです。自分を精一杯ぶつつけた悔のないものを見せてもらひたいと思ひます。

(昭和三十五年三月)

彙 報

○出版記念会

さきにお知らせしました国崎望久太郎教授「近代短歌史研究」、鈴木弘道氏「平安末期物語の研究」、土岐武治氏「旧社集成堤中納言物語」、堺光一氏「上田秋成」の出版記念会

は、二月二十八日午後四時から河原町三條下ル「アサヒビヤホール」で行われた。会は森本修の司会ではじまり、会長和田繁二郎教授の挨拶があつた後、来賓小島吉雄、清水泰、野間光辰、土橋寛、田中重太郎、佐竹壽彦、小島清、中暗の各氏及び卒業生代表法橋理知、北村博氏の、祝辞、著者四氏の挨拶があつて会食に移り、初音書房小島清氏、国崎教授寄贈のビールが余分に加わつて歓談の一刻を過ごし、午後七時を少しまわつた頃村田穆教授の閉会の挨拶があつて会を閉じた。なお、当夜の出席者は三十六名であつた。

○本年度から新しく非常勤講師として左の先生方がおみえになりました。

小島吉雄博士（大阪大学教授——大学院「日本文学特殊問題」(芭蕉)水・二時限)
南波浩先生（同志社大学教授——学部「日本文学特殊講義I」(物語文学)金・二時限
土岐武治先生（立命館中学教諭——学部「日本文学講読IV」(狭衣物語)月・三時限)

○新刊

清水泰「日本文学論考」 六〇〇円
国崎望久太郎「啄木序説」 五二〇円